

VI-8 世代間交流における高齢化の進む地方都市の活性化に関する研究

高知工科大学 学生会員 ○高橋賢多
高知工科大学 学生会員 日浦裕志
高知工科大学 フェロー会員 草柳俊二

1. 背景および目的

近年、我が国の人口構造は高齢化の一途を辿っている。現在では、65歳以上の老年人口が全人口の約20%を占めており、我が国はすでに高齢社会であると位置付けられている。さらに、2050年には総人口の減少と共に老年人口が全人口の35%を占めるとも予想されており、実に3人に1人が高齢者という超高齢社会を迎えることとなる。現状における手すりの設置や段差の解消等の状況を見ると、高齢社会の到来に対して既存の住環境では不備が生じているように感じられる。そこで、高齢者は何をバリアと感じているのだろうか

と考え、高齢者に対してインタビューを行った。その結果、「子供扱いされる」、「普通に対応してほしい」といった意見を多く得た。高齢者がバリアと感じている問題の多くは、施設整備等の身体的バリアの問題よりもむしろ心の内面に起因する精神的バリアの問題であることが判明した。しかし、精神的バリアの問題解決となるような施策は我が国の中央政府が定める法令には存在していない。現状のままでは、高齢者が感じているバリアを解消することはできないと考えられる。そこで私は世代間交流に着目した。互いに接し、分かり合う機会が存在すれば、自ずと心のバリアフリーの精神が育つと考えられる。中央政府が定める法令として、この問題を解決する施策が挙げられてない以上、この問題を改善するためには、自治体や地域が自らの力で世代間交流の機会を作り出し、高齢者と若年層の相互理解を促進する必要があるものと考えられる。本研究は、世代間交流の促進によって高齢者と若年層の間にある精神的バリアを解消し、同時に地域活性化を実現することを目的とする。

本研究では高齢化の進む地方都市の事例として高知県香美市土佐山田町を研究フィールドとした。同町の高齢者及び若者にアンケート調査を行うことによって世代間交流の現状と住民の意識を把握し、同町に新たな世代間交流施設を創出することを検討する。

2. 高知県土佐山田町における実態・意識調査

2-1. 高知県香美市土佐山田町の人口構造

高知県香美市土佐山田町では、2003年に高齢化率27%となり、4人に1人が高齢者という超高齢社会に位置付けられている。本研究を行ううえで、超高齢社会を迎えている土佐山田町は適しているものと考えられる。

2-2. 高齢者及び若者に対するアンケート調査

下記のとおり、アンケート調査を行った。

目的：土佐山田町における高齢者及び若者の世代間交流の現状と意識の把握

内容：現状での異世代との交流機会の有無、異世代と交流機会を持つことに対する興味の有無等

回収結果：土佐山田町在住の高齢者(50～80歳の男女)76名、 私立高知工科大学学生26名

高知県立山田高等学校生徒33名、 山田町立鏡野中学校生徒30名、 配布165枚 (回収率100%)

調査時期：2005年12月～2006年2月

図-3に、高齢者及び若年層の異世代との交流機会及び興味の有無を示す。現在若者との交流機会を持って

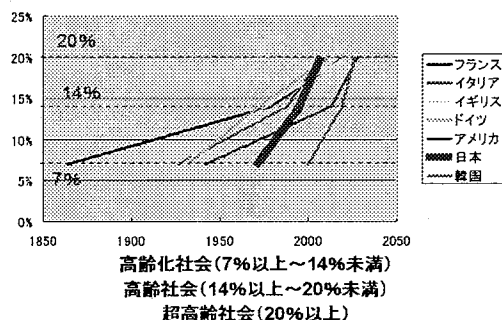


図-1 諸外国との高齢化率比較

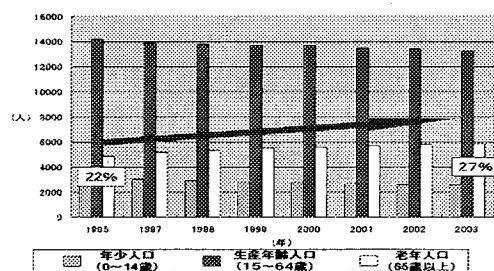


図-2 土佐山田町の年代別人口推移

いる高齢者は全体の47.4%、高齢者との交流機会を持っている若者は62.9%であった。また、世代間交流に対する興味は高齢者全体の84.2%、若者全体の54.3%が持っていた。土佐山田町における世代間交流の現状は、やや高齢者の交流機会が少ないものの、高齢者と若者の双方において半数以上の回答者に世代間交流に興味を持っていることがわかる。さらに、図-4に世代間交流施設利用希望の有無を示す。世代間交流できる施設があれば行きたいと思うかという問いに対し、世代間交流に興味を持っていると答えた高齢者は84.2%、若者は50.5%存在した。これらのことより、高齢者と若者が交流できる場所・施設があれば世代間交流機会の向上に繋がるものと考えられる。

3. 世代間交流の活動可能性分析

世代間交流が成立する条件として、交流の場に、高齢者と若者の双方が共に望む題材を盛り込む必要がある。そこで、アンケートの中で具体的な交流題材の候補を挙げ、高齢者、若年層のそれぞれが世代間交流の際に教えてもらいたい題材と、自らが提供したい題材を回答してもらい、その結果を分析することにより世代間交流が実現する可能性の高い題材を選出した。その結果、パソコン・インターネット、お酒、料理、旅行、談話、手芸、釣り、パークゴルフ、ビリヤードといった題材において高齢者と若者の意見の関連性が見られた。これらが世代間交流を行える題材であり、これらを盛り込んだ交流機会を設けることによって精神的バリアの解消、さらには世代間交流に繋がると考えられる。

4. 解決策の提案

4-1. 少子化の影響を受け生徒数の減少によって休廃校となった、もしくは今後なりうる学校の利用

グラウンドをパークゴルフ場、プールを釣堀、校舎内の各教室を談話室、料理教室、パソコン教室等として活用するなど、分析結果から抽出した題材を組み込むことにより、世代間交流が可能となる。休廃校となった学校施設を利用することにより、施設も安価に建設可能であり、下記の条件で継続的な運営が可能である。

- 営業時間 11:00~17:00の6時間
- 利用可能人数 560人
- 利用費 一日¥100円

4-2. 商店街の空き店舗の利用

昼間は高齢者を中心とした集会所とし、ビリヤード場と談話スペースを設ける。そして、夕刻より主に大学生を対象としたバーとして利用する。高齢者にも利用してもらうことにより、交流機会を設ける。分析結果より、お酒、談話、ビリヤードにおいて世代間交流は可能である。

5. 結論

これまで、我が国では身体的バリアフリーが論じられてきた。しかし、今後の社会で必要とされるのは精神的バリアフリーである。これを満たすことにより、①『元気老人』の増加、②『バーチャル世界の子供』の低減、③『孤立する若者』の低減が実現されると考えられる。そして、これらの実現は世代間交流の実現に繋がる。現状では世代間交流がほとんど存在していない。しかし、調査の結果、世代間交流に対する興味は高齢者・若者共に持っていることが判明した。本研究では世代間交流が可能である題材を分析し、それらを組み込んだ施設の整備を提案した。この施設の整備により、世代間交流は現実のものとなり、さらに、地域活性化の実現へと繋がっていくと考えられる。

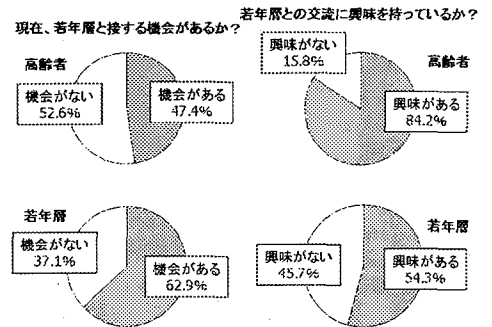


図-3 高齢者及び若年層の異世代との交流機会及び興味の有無

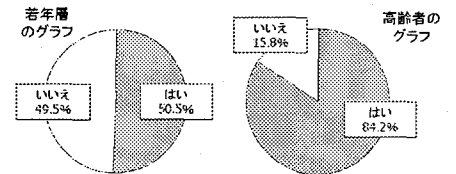


図-4 世代間交流施設利用希望の有無

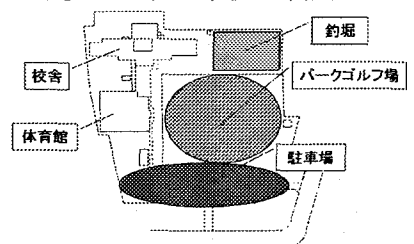


図-5 世代間交流施設 配置図



図-6 世代間交流施設 1階平面図

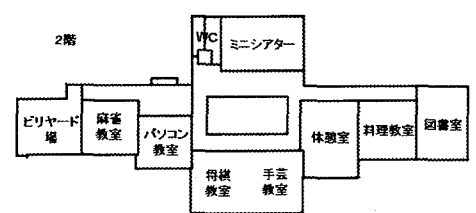


図-7 世代間交流施設 2階平面図